

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520153

研究課題名(和文) 脱ジャンル領域としての「小品」に関する動態的・文化史的総合研究

研究課題名(英文) The “Shohin” as a Domain of No Genre: A Comprehensive Study of its Dynamics and Cultural History

研究代表者

佐藤 伸宏 (SATO NOBUHIRO)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70148724

研究成果の概要(和文)：「小品」とは、明治時代の後半期に成立した短小な散文テキストであり、近代長篇小説の確立の傍らで、それとは異なる脱ジャンルので多面的な性格を備えた特異な散文として、非常に隆盛を示すことになった。この「小品」に関して、先行研究の蓄積はほとんど皆無に等しい状況であったが、本研究では、雑誌メディアを対象とした文献調査をとおして「小品」という枠組みの成立と展開を跡付けるとともに、北原白秋や水野葉舟その他が生み出した「小品」の様式的特徴を明らかにすることによって、「小品」の性格と意義を解明した。

研究成果の概要(英文)：The *shōhin* (“small item”) is a short prose form that came into existence in the latter half of the Meiji period, alongside the development of the long modern novel, but its many genre-defying characteristics set it apart from the novel and helped it thrive as a unique prose form. Yet there has been virtually no research to date on the *shōhin*. The present study traces the creation and spread of the *shōhin* form, through a literary investigation focusing on magazines. Meanwhile, by uncovering the formal characteristics imparted to it by Kitahara Hakushū, Mizuno Yōshū, and others, this study sheds light on the nature and significance of the *shōhin*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：小品、ジャンル、文学史、散文

## 1. 研究開始当初の背景

「小品」は、明治40年前後の近代文体確立期に現れた散文の枠組みであり、明治20年代の「美文」、30年代の「写生文」等の流れを受けて成立し、明治30年代後半には諸雑誌の投稿欄にその枠が設けられて広く普

及した。また当時の多くの作家も好んでこの短文の枠組みで作品を書いている。その時期には、自然主義的な長篇小説の様式が確立をみたが、「小品」はその傍らで、それから流れ落ち、逸脱する多様な要素・モチーフ・発想が流れ込む柔軟な受け皿として隆盛を示すこ

とになる。こうした脱ジャンルの領域としての「小品」については、しかしこれまでの文学研究において問題とされることはほとんどなかった。これまでの研究では詩／小説／随筆／評論など、ジャンルの差異を自明の前提としていたが、近代散文の生成と展開を問い直す上で、こうした一定のジャンルに固定化されない越境的な領域の考察が不可欠の課題としてあると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、「小品」を、一定のジャンルに固定化されない脱ジャンルの領域、散文における多様なジャンルの坩堝として捉え、明治40年前後から大正期にかけてのその動態を明らかにすることを目的とした。そのため、「小品」の成立の基盤となった新聞・雑誌メディアについての文献調査によってその成立と展開の具体相を明らかにするとともに、表象の構造分析や思想史的な観点など、多角的な観点から考察を加えることによって、「小品」という枠組みが成立し隆盛したことの意義を歴史的な展望に立って明らかにすることを試みた。

## 3. 研究の方法

上記の目的に添って、本研究では、主として以下の3つの観点から考究することを研究の方法とした。

- (1) 明治40年前後における「小品」という散文の枠組みについての発生史の解明。
  - (2) 「小品」として書かれた作品の多様性と、多様なジャンルの交差点としての様相を明らかにすること。
  - (3) 「小品」の成立と実態を明らかにした上で、その後の近代日本の散文文化に与えた影響について、ジャンル論的、系譜論的、あるいは作家・作品論的な観点から考究すること。
- 以上のような観点に加えて、個々の作家が創作した「小品」の分析をとおして、「小品」の様式的特徴を明らかにすることを課題として設定した。

## 4. 研究成果

本研究を組織する研究代表者・分担者による研究成果、および研究会における討議等をおして得られた成果を以下に列挙する。

- (1) 読売新聞のデータベース調査によれば、「小品」という語は、美術や盆栽の一形態をも指す、広範な用法をもつ言葉であることが確認されるが、文芸としての「小品（文）」に絞って考えると、その起源の一は明治三十七年三月七日の萬朝報誌上に現れた「百字文」にあることがわかる。これは伊藤銀月の着想と仕掛けである。銀月の提起した「百字文」は、俳句や和歌や新体詩を意識しながら、新しい「短文学」として捉えられており、文

章の優劣以上に内容（発想）を重視し、後続の小品（文）とはやや性質を異にしていた。文芸としての小品（文）に欠かせないモチーフとして、歩行（移動）と観察と風景を考えたとき、国木田独歩「今の武蔵野」は、小品文の集積のように読むこともできる。しかし、『独歩小品』を含めて、独歩自身が「小品」というジャンルに意識的であった形跡は見当たらず、それは「小品」の領域の確定にかかわる興味深い問題を提起している。

(2) 明治期の韻文雑誌記事の調査によって、「小品」というカテゴリーが、スタティックなジャンルとして機能する場合の他に、時として事後的な名指しによっても成立する流動的な枠組みであったことが明らかになった。また、「小品」あるいはそれに近接する性質を持つテキストを多く書いた作家として田山花袋に着目し、柳田國男との関わりを含めてその文学的活動に具体的な検討を加えると、花袋が作家として自立していくに到る文学観、文学理論の形成過程には、「小品」という、自由度の高い、鶴的な文学ジャンルに対する意識がかかわっていると考えることができる。さらに、昭和期に至る綴り方、作文教育と「小品」ジャンルとの関わりもまた今後検討すべき課題としてある。

(3) 「小品」「小品文」が散文群を名指すカテゴリーとしての語用例を調査すると、明治の初期からジャンルの分類のしにくい散文を「小品」と呼ぶ例がある。明治36年ころから「小品文」が新聞雑誌の投稿記事枠として現れる。そして、明治42年ころに、そうした投稿記事の形式とは区別され、積極的な意義をもった散文のカテゴリーとして「小品」という呼称が用いられるようになることが確認できた。その意味での「小品」の代表的な書き手は水野葉舟である。水野は、「小品文」と「小品」を区別し、既成のジャンルの拘束から自由に、作家の「脳から出た感想の流露したもの」を「小品」と呼ぶ。それゆえに、「従来使ひ古した言葉を用ひない事を勧めたい」といい、「クラシック」に拘束されないことを勧めている。この水野と近い吉江孤雁について調査研究をおこなった。吉江は、小品と紀行文の書き手として明治40年代から大正初めにかけて活躍した作家であり、文学研究者である。その作風は、文化的伝統や慣習的表現を脱し、私の〈身〉の界面で生じた出来事の描出を通して「生命の純一な情動」を励起することを志向した点に特質があるといえる。

(4) 日本思想史領域から「小品」というテーマに新たに光を当てることを試み、いくつかのトピックに即して考察を行った。

まず大正期の『ケーベル博士小品集』を取り上げ、ケーベルが自ら「Kleine Schriften」と名付けた意図・背景について検討した。

また、近代における『枕草子』論に着目して研究を行った。短い散文の雑纂物（従って、「小品」に該当する）ともいえる『枕草子』が、明治後期～大正期に高く評価されるようになったことには、「小品」ジャンル成立との相互関係があるのではないかとの仮説を立て、検証を試みた。その中で、雑誌『女学世界』上で1910年代に人気を博した「今様枕の草紙」と題する投稿と、その著者磯千鳥（一宮榮）について調査した。さらに、和辻哲郎の1920年代の『枕草子』論について、手沢本書き込みからその生成過程の実証的解明を試み、成果の一端を日本思想史学会で発表した。

(5) 明治期の雑誌に於いて、「小品」や「小品文」がどのような内容を持ったものとしてあらわれ、定着していったのかを調査した。

明治39年に創刊された雑誌『趣味』、同じく明治39年に再興された『早稲田文学』（第二次）においては、ともに明治42年に「小品」と名付けられた文章を掲載している。この前後には、「小品」が、小説も詩でも論文でも無いものとして誌上で取り上げられていることが確認できる。前2誌と同じく明治39年に文章修行のための投稿雑誌として創刊された『文章世界』では、論文や叙事文、小説等と並んで「小品文」が募集されている。作家による「小品」が掲載され出すのが明治40年であるが、好評だったようで、以後継続して作家の「小品」が掲載され、さらに明治42年からは、年に数回発行される増刊号で「小品」の投稿募集が行われるようになる。以後「小品」は、叙事文でも叙情文でも散文詩でも・・・でも無い文という曖昧な投稿規定にも関わらず、明治期に於いて特集の花形としての位置を保ち続けたのである。

(6) 読者を巻き込む形で生成した「小品（文）」流行の実体を把握すべく、明治末期の博文館『新小説』の読者投稿欄の内実を調査し、そこで選者を務めていた泉鏡花による小品テキストの特質を『鏡花小品』（明治42.9）に収められた諸作に即して明らかにした。柳田国男や水野葉舟といった「怪談」の担い手たちとも近い関係にあった鏡花によるテキストにおいては、怪異の実在性よりもグロテスクで猥雑な細部への執拗な視線が体験のリアリティを支えており、特定のモチーフやトポスの頻出もそうした想像力の磁場として機能している。また、紀行文や人情話においてもプロット（因果関係）を凌駕する詩的イメージの強度がストーリーを牽引していること、性格の異な

る文体・話体の葛藤の場としてテキストが差し出されていることなどをその様式性として抽出した。さらに、関東大震災直後の方法的変質も視野に入れ、大正末期の小品文集についても考察を加えた。

(7) 「怪談」の時代、「追憶文学」の時代、「新浪漫主義」の時代と個別に呼称されてきた明治40年前後の文学的潮流に「小品」なる作品群が共通して関わっていることに注目し、その根底に胚胎している〈言語〉と〈主体〉をめぐる問題機制について追究した。具体的には、柳田国男の『遠野物語』を参照しながら、北原白秋『思ひ出』の手法について考察し、その〈主体〉が“編集的自己”とも呼べるような次元に方法化されていることを検証した。ここから『白秋小品』へと接続されていく彼の道程については、百貨店や百科事典が出現した近代文化史との関わりから探っていくこともできる。「小品」は、そうした架橋的な時代に適応した〈メディア〉としての機能を果たす脱ジャンルのテキストだったと考えられる。

また以上のような観点から、明治37年に創刊された雑誌『ハガキ文学』についても調査を行い、「小品」との類縁性について検討を加えた。

(8) 「小品」は一義的に規定しがたい極めて多面的な性格を備えているが、夏目漱石や国木田独步その他の「小品」テキストの表現を具体的に分析すると、それらに通底する根底的なモチーフとして〈歩行〉の運動を取り出すことが出来る。さらに歩行のモチーフを共有する写生文および紀行文を比較してみる時、それらとの差異として、「小品」は、当て所のない歩行のなかで何らかの対象と遭遇し、立ち止まってしばし想念をめぐらす、その後再び目的のない歩行を始めて、言わば物語的な帰結に至らない形で作品が閉じられるというパターンを備えていることが確認できる。そこに「小品」固有の様式を見出すことが可能であると考えられる。またその歩行の途次で周囲の事物に向けられる視線のあり方は、俳文にも認められる日本の伝統的な散文におけるそれと共通する性格を持つことが確認できる。「小品」は、近代的な散文の様式が確立されてゆく傍らで、そうした平安時代以来の日本の伝統的な散文の性格の受け皿としても機能していた面があると考えられることも可能であろう。

##### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計9件)

- ①野口哲也、『鏡花小品』論—脱ジャンルのテキストの様式—、鳴門教育大学研究紀要、査読無、26巻、201、243—257
- ②高橋秀太郎、信と歓喜—昭和15年の善蔵とメロニー—、季刊 iichiko、査読無、107号、2011、32—43
- ③畑中健二、三木清—板垣直子の剽窃論争とその周辺—、武蔵大学人文学会雑誌、査読有、42(1)、2010、1—45
- ④土屋忍、個人的散文の物語性、歴史性、社会性、武蔵野日本文学、査読無、20号、2010、56—73
- ⑤土屋忍、武蔵野の記憶と現在、独歩と太宰の武蔵野、武蔵野大学出版会、査読無、2010、75—80
- ⑥畑中健二、山田孝雄と文献学、季刊日本思想史、査読無、74巻、2009、29—50
- ⑦野口哲也、「照葉狂言」を語る声、国文学解釈と鑑賞、査読無、74(9)、2009、105—111
- ⑧土屋忍、太宰治「乞食学生」の嘘、武蔵野日本文学、査読無、18号、2009、58—68
- ⑨佐藤伸宏、〈口語詩〉成立の位相、近代文学資料と試論、査読無、18号、2008、1—11

〔学会発表〕(計8件)

- ①佐藤伸宏、オノマトペの翻訳(不)可能性、日本比較文学会東北支部比較文学研究会、2010年7月31日、仙台
- ②畑中健二、思想への数理的アプローチと日本思想史、日本文芸研究会研究発表大会、2010年6月19日、福島
- ③畑中健二、『枕草子』と文献学、日本思想史学会、2009年10月18日、東北大学
- ④佐藤伸宏、外国語に訳された宮澤賢治、日本比較文学会、2010年6月20日、大阪大学
- ⑤佐藤伸宏、翻訳された日本の近代詩、日本比較文学会2008年度北海道大会、2009年3月27日、北海道大学
- ⑥加藤達彦、坂口安吾と殺風景(ピクチャレスク)、坂口安吾研究会第18回研究集会、2009年3月21日、中央大学
- ⑦高橋秀太郎、太宰治とボードレール、様式史研究会第50回研究発表会、2008年7月27日、山形大学
- ⑧畑中健二、富士谷御杖における倫理的構想力、表象文化学会大会、2008年7月6日、東京大学

〔図書〕(計3件)

- ①佐藤伸宏、笠間書院、詩の在りか、2011、261
- ②土屋忍、柏書房、松尾邦之助 長期滞在者の異文化体験、2010、841
- ③山崎義光他、松籟社、『横光利一と関西文化圏』、2008、184—202

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐藤 伸宏 (SATO NOBUHIRO)  
東北大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：70148724

### (2) 研究分担者

加藤 達彦 (KATO TATUHIKO)  
木更津工業高等専門学校・人文学系・准教授

研究者番号：70321403

高橋 秀太郎 (TAKAHASHI SYUTARO)  
東北工業大学・共通教育センター・講師  
研究者番号：40513065

土屋 忍 (TUTIYA SHINOBU)

武蔵野大学・文学部・准教授

研究者番号：20302200

野口 哲也 (NOGUTI TETUYA)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・講師

研究者番号：90533000

畑中 健二 (HATANAKA KENJI)

東京工業大学・大学院社会理工学研究科・助教

研究者番号：30334551

森岡 卓司 (MORIOKA TAKASHI)

山形大学・人文学部・准教授

研究者番号：70369289

山崎 義光 (YAMAZAKI YOSHIMITU)

大阪府立工業高等専門学校・総合工学システム学科・准教授

研究者番号：10311044

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：